

PROFILE

施設	偕行会リハビリテーション病院
所属部署	3階病棟
入職年	2012年
氏名	N・Cさん

資格取得後に、大学病院をはじめ数箇所で看護師として経験を積み、2003年に偕行会リハビリテーション病院に入職。

夜勤専従として活躍をするが、患者さまが退院された後の施設である介護老人保健施設でも経験を積みたいと転職を決意。

介護老人保健施設で働くことでより回復期の重要性に気がつき、2012年に再び偕行会リハビリテーション病院に入職。

現在は「認知症看護」の認定看護師を取得し、患者さまとの関わりを大切に看護をしている。



①患者さま一人ひとりと向き合い、回復をともに喜び合う



偕行会リハビリテーション病院で回復期の看護師として10年近くのキャリアをもつN・Cさん。

回復期でのやりがいは“患者さまの前向きな変化”をサポートする点だそう。

(N・Cさん)

「回復期は患者さまのできることを増やしていき、元の生活に戻っていただくことを目的としています。

そのためには患者さま自身でやってみてもらうこと、そのやる気を引き出すことが重要です。

動作一つひとつを先回りをしてサポートしがちですが、まずは患者さまの動作や行動を見てみて、

何がしたいかを観察しています。

そして一人でできなさそうであれば“何をやるの？”と声をかけ、一緒に解決していきます。

日々の変化を患者さまや周りのスタッフに伝え、患者さまが満足そうな表情をされると、私もとてもうれしい気持ちになります。」

また患者さまとの関わりの中で、一人ひとりの人柄を大切にすることも心がけているという。

(N・Cさん)

「例えば患者さまを“脳梗塞で入院している人”ではなく“料理が好きな80歳の〇〇さん”として

関わること、そして言動や行動に興味を持つことを意識しています。

そうすることで、患者さま自身の人柄を知ることができ、個別性の高いサポートに繋がったり、日々の変化に気がつきやすくなったりします。また、そのような関わり方を意識することで、患者さまから“おはよう！”や“髪の毛切った？”など話しかけてくださるようになり、患者さまの日常に居られることがとてもうれしく感じます。」

とやわらかい表情で話すN・Cさん。

患者さまの変化や日々のコミュニケーションをたのしみながら看護を行っているという。

②多職種で協同しながら患者さまをサポート



他の病院はスタッフステーションに看護師しかいないことも多いが、偕行会リハビリテーション病院は看護師をはじめリハビリスタッフや薬剤師、栄養士など全職種が集まっている。

スタッフステーションでの会話は常に患者さまに関する話で持ちきりである。

(N・Cさん)

「患者さまが無事お家に帰ることを目標とし、全職種でその目標に向かって患者さまをサポートしています。

その中で他職種が行っているサポートはなぜ行っているのか理由を聞いたり、それを踏まえて“看護師としてできることは何か”を相談できる環境が常にあるので、

看護師としての視点だけでなく多角的な視点も養いながら患者さまのサポートができていると思います。」

③きっかけは“高齢者の方が好き” 認知症看護認定看護師を取得

患者さまとの日々の関わりを大切にしているN・Cさんだが、認知症患者さまの看護をするときにいつも抱いている想いがあったという。

(N・Cさん)

「認知症患者さまはこちらの意図しない行動をすることがあります。その際に“なぜそんなことをするのか”と怒る方や行動を制限する方も多いです。私は以前から怒るよりもまずはなぜその行動をするのかを患者さまに聞いてみることで、解決策が生まれてくるのにと感じていましたが、それを周りに働きかけるほどの知識がなく、もどかしさを感じていました。」

そんな想いから知識をつけて患者さまのサポートをしていきたいと認知症看護認定看護師を目指すこととなる。

(N・Cさん)

「学んで改めて分かったことは、認知症の患者さまはできないことが多いと思われがちですが、そうではないということです。できることもあるのに、やらせてもらえないと“存在価値がない”と覇気がなくなってしまう。ここでも患者さま自身を見ることを心がけ、一人ひとりの想いに寄り添うことが大切です。“新聞をたたむこと”や“車椅子で移動すること”などできることはしてもらおうようにしています。こういった点から認知症看護とリハビリ看護の考え方は近いと感じます。」

周りのスタッフにも患者さまの人柄や特性を理解し、一人ひとりにあった看護やリハビリをしてもらえるように、スタッフに対して「なぜ患者さまはこういう行動をしていると思う？」「なぜあなたはこのようなサポートをしたの？」と問うようにしていると話すN・Cさん。より患者さまに寄り添う看護を提供するために、患者さまとの関わりやスタッフとの連携を意識し、日々奮闘している。